

主 論 文 要 約

| 報告番号 | 甲 乙 第 号 | 氏 名 | 土 田 知 則 |
|---|---------|-----|---------|
| 主 論 文 題 名 : ポール・ド・マンの戦争 | | | |
| <p>(内容の要旨)</p> <p>アメリカ・イェール学派(脱構築派)の領袖ポール・ド・マン(1919-83年)は、死から四年後の1987年8月、突如惹起された欠席裁判とも称すべき大論争、いわゆる「ポール・ド・マン事件」の標的に晒され、激しい非難を浴びることになった。当時ベルギーでド・マンに関する論文執筆を準備していたオルトウィン・ド・グラーフが偶然発見した『ル・ソワール』紙掲載の記事「現代文学におけるユダヤ人」(1941年3月4日付)の内容が親ナチ的・反ユダヤ的と断じられ、この文学理論家の過去および現在に関し、根本的な見直しを計ろうとする気運が高まったのだ。本論文は、この「ド・マン事件」について再考することで、そこに表出する「読むことの不在」、「理論への抵抗」という現象と、それに付随する重要な問題を徹底的に暴き出すことを主な目的としている。さらには、ド・マンが故国ベルギーからアメリカへと活動の舞台を移す過程で生じた決定的な方法論上の転回——いわゆる「言語論的・脱構築的転回」——についても考察を巡らせている。「ド・マン事件」の原告側にあったのは、親ナチ的・反ユダヤ的という問題以上に、ド・マンがアメリカにもたらし、新たな批評方法として伝統的なアカデミズムを揺るがすことになった「ディコンストラクション(脱構築)批評」に対する計り知れない嫌悪感と危機感だったからである。また、ド・マンの新奇な批評用語の数々、なかでも論者たちに最も強い抵抗力を生じさせたと想像される「(文字)の物質性」についても、詳細に論じることにした。この難解な用語には、ド・マンの批評行為全般を縮約的に示すと思われる「アレゴリー」的機制のあり方が、最も特徴的かつ具体的に立ち現れていると考えられたからである。</p> <p>第一章「〈卑俗な〉という危うげな一語に託して——ポール・ド・マンの選択」では、「ポール・ド・マン事件」の発端となった『ル・ソワール』紙の特集「ユダヤ人とわれわれ」に投稿された、ド・マンの「現代文学におけるユダヤ人」を含めた全四篇の記事を精読することで、当時の社会状況とド・マンが自らの記事に込めたと想像される巧妙かつ微妙なレトリックについて考察した。ド・マン以外の三人——レオン・ヴァン・ユッフエル、ジョルジュ・マルリエ、V・d・Aと署名された著者——の記事は、概して濃厚な反ユダヤの論調に満ち溢れている。例えば、ユッフエルは「われわれは断固として彼ら</p> | | | |

(ユダヤ人)との混血を禁じ、思想、文学、諸芸術といった分野における彼らの有害な影響から精神的に脱する構えである」、そしてユダヤ人の絵画について論じるマルリエは、「それら(様々な前衛芸術)に、やがては完全この上ない無秩序に立ち至るような、極めて転覆的で破壊的な性質を付与してしまったのは、まさにユダヤ人たちなのである」と言い放っている。

ド・マンの記事は華やかな絵や写真を付された他の記事の右下隅に、目立たぬようひっそりと掲載されている。そこには、養うべき家族を抱えた弱冠 21 歳の若者が、ナチ統制下のブリュッセルでぎりぎり書き付けることができたと思われる、綱渡り的なエクリチュールを確認することができる。主な要点を三つほど指摘しておくなら、まずこの記事でド・マンが高く評価する作家にドイツ人は一人も含まれていない。それどころか、そこにはスタンダール、ジッド、ヘミングウェイ、ロレンスらと並び、フランツ・カフカの名が挙げられているのだ。これは決して何気なく付加された名前ではない。何故なら、「現代文学におけるユダヤ人」執筆から約二ヶ月後に、同じ『ル・ソワール』紙に掲載された記事「シャルル・ベギー」において、ド・マンはこの熱烈なドレフュス派の詩人に対して、心からの賛辞を表明しているからである。

より本質的なレトリックに関する策略は、冒頭の一文「卑俗な反ユダヤ主義は、ユダヤ化されているという理由から、戦後(1914年から18年にわたる戦争後)の文化現象を墮落頹廢したものとみなすことに欣々としている」に潜んでいる。後の脱構築的な分析を先取的に提起するかのように見えるこの一節は、文章の明快で一義的な解釈の可能性を宙吊りにしている。ここにいきなり配された「卑俗な」という形容詞は、いったいいかなる意味作用を担っているのか。この一文は反ユダヤ主義を称揚しているのか、あるいはそれに異を唱えているのか。「卑俗な」という一語がなければ、この一文は明らかに反ユダヤ主義を批判するものになってしまい、ド・マンの生命を危険に晒すことになったであろう。この一語が存在するために、当一文はかろうじて反ユダヤ主義を否定しない性質のものとなりおおせているのだ。つまり、「卑俗な」という語は、ある特定の反ユダヤ主義のみを形容するものであり、他に純正な反ユダヤ主義、すなわち、道義上いささかも問題のない、尊重すべき反ユダヤ主義が存在するという解釈をどうにか成立させることを可能にしているのである。そしてもう一つ可能な解釈は、反ユダヤ主義は総じて卑俗的であり、例外はあり得ないというものである。カフカやベギーへの言及に注目するなら、後者の可能性が濃厚だが、その点を見なければ、どちらがより妥当な解釈であるかを見定める根拠はない。ド・マンの身が安全だったことを考慮するなら、当事者たちがこの巧妙極まりないド・マンのレトリックに気づかなかったことは明らかである。ド・マンは確かに反ユダヤ主義を標榜する『ル・ソワール』紙の特集コラムに一稿を投じた。それは紛れもない事実である。しかし、それでもなお、この記事の有する非

協調的なスタイルは、ド・マンが親ナチ的であったとする機械的な解釈に亀裂を生じさせ、言説の内部に潜むアポリアを暴き出すものとなっている。反ユダヤ主義というキー・タームにさりげなく添えられた「卑俗な」という一語。それは依然として、ド・マンを反ユダヤ主義者と断罪する卑俗な「読み」に対する危うい防御柵のようなものとして機能し続けているのである。

同種の問題は「付言するなら、ヨーロッパから隔離された地にユダヤ人居留地を設営するというユダヤ人問題への解決策は、西洋の文学生活には少しも嘆かわしい結果をもたらさないことがわかるだろう。西洋の文学生活は結局、つまらない価値しかもたないいくつかの平凡な個性を失うだけで、これまで同様、自らの偉大な進化的法則に従って発展しつづけていくことであろう」という一節にも潜んでいる。この説明は 1938 年の国際会議で発案された通称「マダガスカル解決策」(Madagascar solution) を暗示している。したがって、これを後に待ち受ける「最終解決策」(Final solution)、すなわち「ホロコースト」と読み違えることは、根底的な誤りと言えるだろう。では、ここで「つまらない価値しかもたないいくつかの個性」とはいったい誰のことを示しているのだろうか。ド・マンを親ナチ・反ユダヤ的と決めつける人たちにとっては、曖昧な点は何一つ存在しない。つまり、それがユダヤ人作家たち以外のものを意味する可能性はまったくないのである。しかし、そう断ずる根拠はどこにあるのだろうか。ド・マンの主張は、ヨーロッパ精神とユダヤ精神は根本的に異質なものであり、それぞれが独自の価値を有するというものであった。つまり、ユダヤ精神の影響がなくなることで大打撃を受けるような作家がもしいるとしたら、それこそがまさしく「つまらない価値しかもたないいくつかの平凡な個性」ということになるだろう。したがって、その場合、この皮肉に満ちた表現の指し示すものはユダヤ人作家たちではなく、むしろ才能のないヨーロッパ人作家たちの方だということになる。この表現は作家全般に関する一般的な定式化であって、ユダヤ人だけを特定的に名指す性格のものではないのである。ここにもまた、後期のド・マンを彷彿とさせる巧妙な表現の才が顔を覗かせていると言えるだろう。

第二章「ポール・ド・マンと二人のコラボラトゥール」では、「現代文学におけるユダヤ人」とほぼ同時期に執筆された二人の対独協力作家(コラボラトゥール)に関する記事について論じている。ド・マンはこれら二人以外の親独的な作家(ジャック・シャルドンヌ、アンリ・ド・モンテルラン)についても文章を寄せているが、ここでは最も対独協力的とみなされたロベール・ブラジャック(1909-45年)に関する記事「ロベール・ブラジャック『われらの戦前』」(1941年8月12日付)と、ピエール・ドリユ・ラロシェル(1893-1945年)に関する記事「ドリユ・ラ・ロシェル『今世紀を理解するための覚書』」(1941年12月9日付)を取り上げている。その狙いは無論、「コラボラトゥール」と称され、後に厳しく糾弾されることになったこれら二人の作家を、ド・マンが

どのように読んでいたのかを確認することにある。これらの記事は「現代文学におけるユダヤ人」とある意味で密接な繋がりがあってもかかわらず、先の論争においてはほとんど詳しく言及されることがなかった。しかし、この論争が「ナチ問題」と深く関わることを考慮するならば、これらの記事を読むことにはそれ相応の意義・意味があることになるだろう。フランス現代史の国民的汚辱を体現する人物であり、今でも依然として最悪の売国者・裏切り者・重大戦犯とみなされ続けているブラジヤックについての記事にはナチスに言及している部分が二箇所ある。しかし、そこで述べられているのは「ドイツ国家社会主義の勝利」という事実と、それに直面した若きブラジヤックの戸惑いでしかない。ド・マンが『われらの戦前』を取り上げ、それを評価したことは事実だが、そこには後に対独協力者に変じるブラジヤックの思想に加担し、それを積極的に擁護するといった意図は微塵も感じられない。ド・マンにとって、ナチス台頭などの政治的な事件は、文学者たちを彼ら本来の使命から遠ざけ、文学共和国の旧き良き伝統を疲弊させるマイナス要因としか思えないからだ。それは、この記事の最後から二番目の一文に明確に表現されている。「私の想像によるなら、『われらの戦前』は依然として、教養あるフランス人に対し、失われた樂園を呼び覚ましているのである」。芸術・文学活動の内に身を置き続け、可能な限り非政治的な立場を保持すること。それはブラジヤックら、当時の才気溢れる文学者たちに強く望まれていたこと——あるいは、ド・マンが切に望んでいたこと——かもしれない。しかし、戦争をはじめとする社会的な激変はそれを許さなかった。「彼らの心性はまったく異なる道へと突き進む」ことを余儀なくされていた。それはいわば「避けがたい必然」だったのである。

ブラジヤックに対するのとは対照的に、ド・マンはドリユに対しては概して辛辣な評価を示している。ドリユは自身の主張する「反-合理主義的テーゼ」——肉体に対する精神の優位性を否定し、精神的な諸価値と肉体的な諸価値の統合を推奨しようとする立場——を当時の政治的な風潮、とりわけ「ファシスト的なイデオロギー」の内に確認される「スポーツ的な力」——反-主知主義的・反ユダヤ的なもの——に見出している。ちなみに、ヒトラーが「ナチス」総統に就任した二年後の1936年、ベルリンで開催されたオリンピックは、「ナチス」による国威発揚のための祭典であるとともに、まさにスポーツの一大イベントだったのである。ドリユはこの他にも、「中世」に特権的な位置を割り当てたり、歴史・文学史の破局をもたらしたとして合理的哲学の過ちを批判したりしているが、ド・マンはそのいずれの態度に対しても、過度に図式的であり意図的であるとして否を突きつけている。ドリユの作品には「否定しがたい活力の徴」が刻まれているというド・マンの批判的言説に秘められているものを理解するには、当時この「活力」という言葉がユダヤ的なもののアンチ・テーゼとして機能していたことを考えるだけで十分であろう。

ド・マンがこれらの記事を執筆した1941年の時点において、二人がやがて「コラボラツール」という範疇に括られ、四年後には揃って壮絶な死を迎えるという結末を予想するのは、たぶん不可能であったろう。したがって、後にド・マンを断罪することになる人たちにとってはまさに逃れ向きの資料と言えようが、「現代文学におけるユダヤ人」とほぼ同時期に書かれたこれら二つの記事と「ナチズム」との間には何ら必然的な関係は存在しない。運命の悪戯と言うべきか、ベルギーの若きジャーナリストと後の二人の「コラボ作家」は、たまたま同時代に居合わせたという、おそらくただそれだけの理由で出会うことになってしまったのである。

第三章「歴史から言語へ——ポール・ド・マンの言語論的転回」は、ド・マンがベルギーからアメリカに居を移し、やがて「イェール学派」の領袖としての地位を確立する過程で生じたと考えられる思想的な大変革——「転回」——について考察している。アメリカに渡った後のド・マンは徹底して反-歴史的な立場を表明し続けたが、ドイツ占領下の彼の著作には、後期のそうした姿勢を予測させるような要素はほとんど見受けられない。後期の著作では負の価値を背負うことになる用語や理念が頻出し、枢要なキー・タームの役割を演じている。具体的に言うなら、ベルギー時代に書かれたものには、その後例外なく批判の対象として位置づけられることになる「統一性」、「一貫性」、「均質性」、「総合」、「完全調和」、「オリジナリティ」、「美の源泉」、「客観的現実」、「調和のとれた物語」、「よりよき統制」などといった用語や表現が、歴史との関係において、高々と掲げられ称揚されている。特に注目されるのは、1942年6月7-8日に掲載された「批評と文学史」という記事に見られる「内的一貫性を有する創造的な現象」という表現である。こうした言い方が後期の脱構築的な視点と根本的に対立するのは明らかである。ド・マンは歴史や文学史の問題について機会あるごとに積極的な発言を繰り返し、二冊の主著——『盲目と洞察——現代批評のレトリックに関する試論』（1971年）、『読むことのアレゴリー——ルソー、ニーチェ、リルケ、プルーストにおける比喩的言語』（1979年）——および『理論への抵抗』（1986年）等に収められた諸論で、歴史学という学問に潜むイデオロギー的陥穽を執拗に暴き立てている。グレゴリー・S・ジェイの的確な表現を借りるなら、ド・マンの場合、「文学史を書くという試みは、結局のところ、そうした試みの不可能性についての省察に再度帰着してしまう」。ド・マンの思想的転回がいつごろ、どのようにして彼の身に出来たかは定かでない。だが、ベルギー時代と後期の間「隔絶」、「断絶」を生じさせたものが、「歴史」から「言語」へ、あるいは「歴史」から「修辞」へという意識転換であったことは想像に難くない。それはいわばド・マンの「言語論的転回」として生じたのだ。

とはいえ、ド・マンの「言語論的転回」と、通常、構造主義的な文脈で語られる「言語論的転回」の間にはかなり大きな隔たりがある。もちろん、共通点がまったくないわ

けではない。例えば、1972年に執筆され、1990年に雑誌『イェール・フレンチ・スタディーズ』第77号に掲載された論考「ロラン・バルトと構造主義の限界」には、次のような件がある。「バルトから学ぶべき主要眼目は、文学には対象指示的な機能がないということではなく、「究極的な」指示対象には決して到達できないということ、したがって、批評的メタ言語の合理性は絶えず脅かされ、疑念に晒されているということである」。この一節には後期ド・マンの言語観が既に明確な形で姿を現している。言語と指示対象の間にはいかなる論理的・必然的な結びつきも存在しない。ここまでは構造主義的な言語観と大差はない。だが、ド・マンの主張には続きがある。言語は確かに究極的な指示対象に到達することはできない。しかし、それはまた自動的かつ不可避的に、ある何かを指し示してしまう、ということだ。つまり、言語は「指示」という機能と同時にそれとはまったく逆向きの方向性を与えられ、それら二つの方向性の間で永久に引き裂かれることになるのだ。ド・マンの言う「アレゴリー」とは、言語の置かれたこうしたアポリア的な逆境を比喩的に示唆する用語に他ならない。そして、後にド・マンを批判する者たちが不快感を示した「物質性」、「出来事」、「アレゴリー」、「機械」といった難解な用語や概念の数々は、すべてこの「言語論的転回」によってもたらされた。とりわけ重要なのは「出来事」という概念である。「出来事」とはあくまでも因果性や論理性とは無関係な場において出来るものであり、ある「出来事」と別の「出来事」の間には本来何の結びつきも存在しない。ド・マンの表現を敷衍するなら、そこにあるのは「無作為さ」に支配された「無作為な出来事」でしかあり得ない。亡くなるおよそ半年前(1983年春)に準備されたベンヤミンに関する講義メモにも次のような注目すべき記述が見出せる。「歴史は人間的でもなければ、自然的でもない。また、現象的でもなければ、時間的でもない」。こうして、若き日のド・マンが「歴史」に対して思い描いていた審美的な理想像——「部分部分が相互に調和する見事に完成された全体、内的一貫性を有する創造的な現象」——は、恣意性や無作為性を本質とする「物質(性)」や「出来事」への強靱な思索を経て、完全にその姿を消すことになる。そして、何よりも重要なのは後の「ド・マン事件」の勃発にもこうした転回が大きく関わっていたことなのである。

第四章「ポール・ド・マンと〈物質性〉に関する二つの解釈系列」では、ド・マンの脱構築批評にとって最重要と思われる「物質性」という概念の解釈について検討した。「物質性」、あるいは「文字の物質性」は、ド・マンの用語・概念のなかでもとりわけ晦渋である。その規定をめぐっては、これまで明確に異なる二系列の説明がなされてきた。一つは、この用語を物理的・即物的なニュアンスから切り離し、あくまで理念的なものとして思考しようとするもの。そしてもう一つは、それを具象的なものとして——つまり、文字どおり「物質=もの」として——思考しようとするものである。批評家・研究者の

すべてが、いずれか一方の解釈に与しているわけではない。確かに、一方の立場だけを厳然と主張する者もいるが、これら二つの解釈が同一の批評家・研究者のなかで、混然と同居していることも決して珍しくはないのだ。

二系列の解釈は明らかに乖離している。とはいえ、必ずしも矛盾してはいない。そこには、ド・マンの主要なキー・ワードである「アレゴリー」の機制と相通じるものが潜んでいる。抽象的な理念としての「物質性」を主張する者としては、それを美学および美学イデオロギーの完成を阻む予測しがたい「力」と規定するレイ・テラダ、文字の具象的な「もの性」を決して認めないマーク・レッドフィールド、そして視覚や聴覚によって具象的に把握・感知されるような「もの性」の外部に「物質性」の概念を位置づけるジャック・デリダらがいる。そして一方に、「物質性」にそなわる具象的なものとしての側面を目に見える「文字」のうちに見て取るマーティン・マックイラン、「物質性」を耳に聞こえる無意味な「音」のなかに探り当てるJ・ヒリス・ミラーなどがある。

この文字の「物質性」という問題を考える上で、日本には極めて興味深い作家がいる。「文字禍」、「悟浄出世」、「かめれおん日記」などの作品を、ベルギー時代のド・マンと同じ頃に執筆していた中島敦（1909-42年）である。この稀有な作家には、奇しくも、「歴史」、「出来事」、「器械=機械」、「自由意志=意図」など、ド・マン的なテーマが頻出するが、ド・マンの感覚と酷似する物質的な文字観は「文字禍」（1942年）のなかに凝縮された形で立ち現れている。この作品に登場する老博士ナブ・アヘ・エリバにとって、「文字」とは本来「単なるバラバラの線」、「単なる線の集合」、すなわち「物質」に過ぎないのだが、それはやがて特定の音や意味と擬似必然的な関係を取り結ぶことになる。表現こそ異なるものの、こうした関係を出現させる「文字の精霊」は、ド・マンの言う「美学イデオロギー」とまさに同種の趣を呈していると考えられるだろう。何故なら、中島が提起しているのは「文字」の恣意的=暴力的な指示機能およびその縮減不可能性という問題であり、ド・マンの「美学イデオロギー」批判の核心もまさにそこにあったからである。

ところで、中島敦のテキストが興味深い理由はもう一つある。それはド・マンと同じく、「文字」あるいは「文字の物質性」の問題が「歴史」の問題と密接に関係づけられている点である。ド・マンは多くの歴史家たちが使用してきた「事実」あるいは「史実」という用語に「出来事」という用語を対置させている。「出来事」とは因果性の外部で無作為に到来する一回限りの現象を意味する。したがって、個々の出来事の中に必然的な結びつきは存在しない。われわれがそれらを結びつけ、そこに必然的な関係を措定するのは、いわば審美的な欺瞞（美学イデオロギー）なのである。ド・マンは『ロマン主義のレトリック』に収められた論考「汚損されたシェリー」のなかで、シェリーの詩篇「世俗の勝利」について次のように述べている。「『世俗の勝利』は、行為であれ、言葉であ

れ、思考であれ、テキストであれ、何ものにも先行する、後続する、あるいは他所に存在する何かと肯定的あるいは否定的に関連して起こるのでは決してなく、ただ無作為な出来事としてのみ起こるということ、そしてそうした出来事の力は死の力のように、生じることの無作為さに帰せられるということをおれわれに言い渡している。それはまた、それらの出来事がなぜ、どのようにして、誤謬の露見にもかかわらず繰り返される、歴史的・審美的な回復システムのなかで再建されなければならないかをわれわれに警告している」。意味とは無縁な「物質」としての「文字」に意味が恣意的・暴力的に刻み込まれるように、無作為に生じる「出来事」の間に統一的な繋がりが措定され、それがやがて「歴史」——そして時には「正史」——として定立される。しかし、それはあくまで虚構として仮構された「物語=歴史」に過ぎない。同種の問題は中島敦の「文字禍」にある若き歴史家イシュデイ・ナブの唐突な質問「歴史とは、昔、在った事柄をいうのであろうか？それとも、粘土版の文字をいうのであろうか？」の内にも明確に見取することができる。

「物質性」という概念を純粋な抽象的理念と捉えるか、はたまた具象的な「もの性」として考えるかについては、同じ批評家・研究者のなかでも微妙な揺れ動きが認められる。例えば、ヒリス・ミラーは「物質性」という概念の具象性を唱える一方で、レッドフィールドらの主張にも加担している。バーバラ・ジョンソンは「物」と詩学に関わる考察をカントの「物自体」という視点から開始するが、最後は「文字」の具象的形状という問題に比重を移している。デリダの場合はさらに複雑で、『シニエポンジュ』（1984年）のデリダと「タイプライターのリボン——有限責任会社 II」（2001年）のデリダは、少なくとも「物質性」の問題に関する限り、明らかに逆向きの関心に引きつけられている。つまり、「物質性」という概念は、具象的な「物質=もの」と抽象的な理念の双方に関係し、両者を結びつけると同時に引き離しているのだ。このことは、「物質性」が「アレゴリー」の機制を示す下位概念の一つとして機能している可能性を指し示している。J・M・G・ル・クレジオが語るとおり、言語とは「あるがままの物質」であると同時に、「言葉につくせぬ〔・・・〕永遠の空虚」でもあるのだ。

第五章「〈ポール・ド・マン事件〉とは何だったのか」では、反ド・マン陣営の大物歴史学者として「ド・マン事件」をミス・リードしたジョン・ウィーナーを例に、この事件の背後にあったものを明らかにしている。資料として取り上げたのは、『応答——ド・マンの戦後ジャーナリズムについて』（1989年）に掲載されたJ・ヒリス・ミラーの批判文書「ジョン・ウィーナー教授への公開質問状」である。ミラーは「イェール学派」の“Big Four”の一人としてド・マンの傍らにいた人物であり、この論争においては、「脱構築派」という理由だけで、いわば被告人席に連座させられている。

ミラーは『ル・ソワール』紙などの記事を入念に精査・精読した上で、「ド・マン事件」

という一連の騒動に通底する諸問題を、おそらくどの論者の議論よりも的確かつ簡明に摘出することに成功している。誤解を避けるために付言しておくなら、ミラーは、ド・マンの側には少しの責任もなかったと主張しているわけではない。それについて、ミラーはこう述べている。「私はそう信じていますが、ド・マンは自身が書いたもの、そして自身が書いたものの結果=効果に対して責任を負わなければなりません」、「ド・マンが『ヘット・フラームスヘ・ラント』紙のために書いたもののなかには、ファシスト的イデオロギー要素〔・・・〕やドイツ人占領者への支持や協力は存在しない、と言っているではありません。存在します。ド・マンには、自身が書いたもの、そしてそれが与えたかも知れない結果=効果について説明する責任はない、とも言っていません。そうすべきです」。ミラーがまず批判するのは、ウィーナーらに見られる「読むこと」の決定的な不在という問題である。ウィーナーの発言には「読むこと」への不誠実な態度が随所に現れているが、それは然るべき論者の良識を大きく逸脱している。多大な影響力を有する歴史学者であるだけに、事はさらに重大である。最も基本的な指摘から始めよう。ウィーナーは論敵の没年さえ正確に把握していない。ド・マンは1983年、64歳で亡くなったが、ウィーナーはそれを1984年、65歳と伝えている。問題となった記事についても、ウィーナーは2篇と述べている。これは言うまでもなく、1篇の誤りである。ミラーはウィーナーに対し、「あなたは本当にその問題の記事を読んだのですか？」と問いかけているが、答えは明白であろう。読んではいないのだ。ウィーナーはミラーのこの批判に対して、執筆記事の締め切りに追われていたなどと言い訳しているが、どう考えても笑止千万と言う他ない。重大な判断を下すべきときに、誤った情報が相手の名誉を頗る傷つける可能性があるときに、この権威ある歴史家は資料の綿密な調査・確認・精査・精読を怠ることで、アメリカだけではなく、当時の批評界全体に多大な誤解と害悪をもたらしたと言ってよいだろう。

ウィーナーの言明の奇異さと杜撰さは、ジュリア・クリステヴァの研究を反ユダヤ主義と決めつける、「現代文学におけるユダヤ人」は言うに及ばず、「コラボラトゥール」やシャルル・ペギーに関する記事に目を通していない、クルト・ヨーゼフ・ヴァルトハイムとド・マンを同一視する、資料をオリジナルのフランス語のまま提示することをダメージ・コントロールと断じる、ハンス・ローベルト・ヤウスがイェール大学で教鞭を取っていたことにかこつけ、ド・マンを彼の共謀者と主張するなど、枚挙に暇がない。

「読むこと」の不在は、証言情報の手緩い調査・確認にも現れている。ミラーが挙げているのは、ド・マン自身も記事を寄稿したことのある『カイエ・デュ・リーブル・エグザマン』紙の編集長だったシャルル・ドゾーニュ、そして、ド・マンの友人で、後にフランス大手出版社の編集長を勤めたジョルジュ・ランブリックスの肉声表現である。二人の証言に拠れば、ド・マンは反ユダヤ的な意見や態度を一度も表明したことがないばかり

か、フランスのレジスタンスに手を貸していた。真実か否かにかかわらず、責任ある歴史学者ならば、そうした証言を無視することはまず許されないだろう。ミラーがいみじくも述べているように、「二、三度電話すれば」、それくらいの情報は瞬時に確認できたに違いないからである。

ミラーがさらに注目するのは、「脱構築批評」に対する数々の誹謗中傷である。こうした断罪は結果的に、当のミラーをはじめ、ジャック・デリダをもファシストと決めつけることになる。ド・マン糾弾者たちの目的はただ一つ。アメリカ批評界の伝統を揺動・攪乱させる「脱構築」という悪しき外来新種を、ド・マンという外来思想家の擬似スキャンダルを利用して完全に駆逐することでしかない。「脱構築」に対する無理解にも目に余るものがある。ウィーナーは「言語」、「テキスト」、「読むこと」など、この批評が実践していたことを完全に曲解している、あるいは端から理解しようとはしていない。「脱構築」に関する最も由々しき無理解の一つは、その批評実践が読者や批評家の「主体」や「意図」に関わるものとして思念されていることだ。「批評家は意味を創造することができる」。「脱構築批評」を説明すると思われるこうしたクリシェは、次第に過激さを増し、最後には「脱構築者は、自分の思いのままに、勝手気儘に意味を創造することができる」といった見解にまで突き詰められることになる。こうした誤解は現在に至ってもなお、払拭し切れてはいない。益々そうしたクリシェが広がるばかりだ。ちなみに、「AがBを脱構築する」と言われるとき、Aとして想定されているのは、われわれの「主体」でもなければ、「意図」でもない。AもBも「言葉」あるいは「テキスト」なのだ。さらに言うなら、「脱構築」が最も根本的な現象として暴き出すのは、「AがA自体を脱構築する」、すなわち、デリダ、バーバラ・ジョンソンがそれぞれ、「差延」、「内的差異（批評的差異）」という表現で示そうとした「言葉」や「テキスト」の内的な揺動に他ならない。われわれは、こうした揺動に手を貸すことはない。それはまさに、阻止できないものとして、「言語」・「テキスト」の内に到来するのだ。それは、より巨視的に眺めるなら、「文学理論」への抵抗と言い換えてもよいだろう。彼は「新歴史主義」など、「脱構築」に隣接する新手の批評方法をことごとく破壊的なものとみなし、それらの徹底的な抹消を唱えているのだ。つまり、ド・マンの糾弾者たちを真に突き動かしていたのは、自分たちがこれまで執拗に守り抜き、その権威・権力を維持してきた旧来型の研究法が、「脱構築」など外来新種の侵入・到来により決定的な破壊を被るのではないかという強迫めいた不安・恐怖に他ならない。「ポール・ド・マンの戦争」、それは四十数年前に書かれ、十分な精査・精読も施されなかった一篇の新聞記事を標的に繰り広げられた愚かな知の戦争だったと言ってもおそらく過言ではないだろう。

本文中に、『ル・ソワール』紙、『ヘット・フラームスヘ・ラント』紙、『カイエ・

デュ・リーブル・エグザマン』誌、『ジュディ』紙、『ビブリオグラフィ・ドウシエンヌ』誌から訳出した 12 篇の記事——「現代文学におけるユダヤ人」、「シャルル・ペギー」、「批評の可能性について」、「ドイツ現代文学への手引」、「フランス文学の現代的諸傾向」、「ヨーロッパという概念の内実」、「批評と文学史」、「フランス詩の現代的諸傾向」、「文学と社会学」、「戦争をどう考えるか?」、「イギリスの現代小説」、「出版社の仕事」——を、「訳者解題」を付す形で収録した。